

# かたりべ 40

豊島区立郷土資料館だより

金参拾萬圓石井文男

金参拾萬圓石井忠男

金参拾萬圓川上源一郎

金参拾萬圓安藤 守

金参拾萬圓豊島 展

金参拾萬圓豊島幸治郎

金参拾萬圓安藤一男

金参拾萬圓豊嶋春夫

金参拾萬圓安藤 寛

金参拾萬圓豊嶋重夫

金参拾萬圓豊島 博

金参拾萬圓豊嶋正則

金参拾萬圓豊嶋利行

金参拾萬圓豊嶋英治

金参拾萬圓豊嶋壽徳

金参拾萬圓安藤三徳

金参拾萬圓石井一夫

## 讃岐の国の豊島さん大集合！

上の写真は、香川県高瀬町下勝間にある威徳院勝蔵寺の修理の時の石碑ですが、たくさんの豊島さんがいます。この外にも、高瀬町には多くの豊島さんがお住みになっていて、隣の豊中町の町長さんも豊島さんです。

高瀬町の豊島さんは、「トヨシマ」と呼ぶそうですが、この豊島さんは、中世からの古い歴史を持っています。武蔵国の武士で豊島区民のルーツになる武蔵豊島氏は、南北朝内乱の時に足利尊氏に従って大活躍し、四国に所領をもらいます。それが、讃岐国本山庄（香川県豊中町）の公文職でした。本山庄は、高瀬町の南に隣接してあった庄園です。讃岐国に移住した豊島氏は、戦国時代までこの地域に住んでいます。が、近世初頭に生駒氏が讃岐丸亀藩主となるとその家臣となり、勝間の地をもらいます。その後勝間の豊島氏は、香川県宇多津町に移住して大庄屋となりますが、その一族が勝間に残り、現在まで続いているというわけです。

この讃岐国の豊島さん以外にも、全国各地に武蔵豊島氏と関係する豊島さんが住んでおられると思われれます。

郷土資料館でも、いつか「全国の豊島さん大集合！」というような企画をもってみたいと思います。

（小林）



# 特集 新館設立に向けて XIV

## 博物館の仕事つてナニ？

(8)

### 現代の蔵―郷土資料と収蔵庫―

資料館は図書館とはちよつと異なる施設です

資料館では、郷土の歴史を知るための参考図書を描えています。図書館や書店で見つけにくいような本もありますので、それらを閲覧に来館される方や、資料館発行の『資料集』や特別展の『図録』を見に来館される方もいます。でも、一冊しかない貴重な本もあるため貸出しはしていません。また、レファレンス室がないために不便をおかけしていますが、所蔵する書籍の目録は随時作成していますので、まず、図書館で目録をご覧になってから来館することをおすすめいたします（『収蔵資料目録第七集（郷土資料関係図書目録Ⅰ）』一九九四年刊）

資料館には現在、約二万冊の図書・約三千冊の貴重書がありますが、資料館が資料館らしさを発揮するのは、むしろ展示室や収蔵庫にある実物の資料です。今夏、小学校4年生のご父兄の方から次のような電話がありました。「子供の宿題で雑司が谷の鬼子母神の境内にある川口屋さんのことを知りたいんですが、資料館に行けば、

何かわかる資料を見せてもらえますか？」というものです。当館では、常設展の一つに、江戸の

面影を伝える歴史的な場所として雑司が谷の鬼子母神を紹介していますが、いつも、全ての資料を展示しているというわけではありません。

早速、収蔵庫の奥から関係する資料を取り出し、来館の日を待ちました。当日は、小学校4年生の男の子とそのお母さんが来館しました。川口屋さん（江戸時代から続くお菓子屋さん）の飴袋の絵柄の版木と、飴を作る時に使用したと思われる道具、江戸時代の家紋入りの看板を見てもらい説明しました。一時間ほど、楽しく、興味深く観察してお帰りになりました。

資料館には、郷土に関係した資料は展示してありますが、いつ、どんな資料でも展示してあるとはかぎりません。長期間展示していると痛む場合がありますし、資料館の展示場所が狭いこともあって、展示するものを入れ換えているのです。ということ、このような問い合わせの場合には、そのつど収蔵庫から資料を出し、ご覧いただくという形をとっています。

### 郷土資料の誕生

当館では、収蔵している資料を多くの方に見ていただきたいと思っています。また、新しい資料を積極的に収集したいとも考えています。

では、資料館にどのような経路で資料が到着するのでしょうか。それは、「昔使っていた古いものがあるんですが、資料館にどうかと思います。……」という電話の一報から始まります。実際にどのようなものかは見ないとわかりませ

ん。そこで、目を決めて学芸員がお宅にお邪魔をして拝見します。そして、郷土の歴史を知るために有益な資料であれば、所有者のご意向を確認し、寄贈していただきます。その場してい



No. 1





れは、資料館側の控とする番号です。さらに、カードの裏面には、そのものに関する履歴を書いておきます。ものをいただくということは、そのものに関する情報をいただくということとです。これが、かなり重要なこととなります。ですから、いただく資料が多いと、寄贈者から何日もその資料に関するをおたずねすることとなります。学芸員の仕事の大きな部分を占めることとなりますが、疎かにできぬ作業で、これらの情報があつてはじめて、資料として生きてくるのです。

寄贈資料が、いい状態で保存してあつたかという点、そうでないこともあります。何年も使用していなかつたため埃を被つていたり、金具が外れていたり虫食いがあつたりします。ですから、収蔵庫に収める前には埃をとり除き場合によつては水洗いします。そして燻蒸(防虫、防かびのために消毒すること)をしてから収蔵庫に収めていきます(No.5)。カードの表面に記載がある「収納場所」というのは、収蔵庫のどの棚の位置にあるのかを



No. 5

示しているものです。こうして、資料は「展示」の出番を待つこととなります。

#### 区民共有の郷土資料として

最近、家の増改築等によつて、どうしても自宅で保管しきれなくなり、役立てられるものであつたらつたという意思で資料館に寄贈する方々が増えていきます。特に三・五月にはこうした内容の問い合わせが続きます。さらに、近年の歴史ブームは、郷土資料の収集を行なう博物館・資料館の役割を強めています。そのため、今後より一層、資料の寄贈があることでしょう。かつて区内に住んでいた方が、他区や近県に移転した場合でも、豊島区に縁があるものだからということ、寄贈の連絡をいただくことがあります。というわけで、区内外にある四箇所の収蔵施設は嬉しい悲鳴をあげています。

さて、本年一月の阪神・淡路大震災では、多くの文化遺産が失われました。それらの地域の博物館は、自館の収蔵資料にも多大な被害があつたという報告をしています。当区の場合も決して他所事ではありません。資料とその収蔵施設のことにつきましては大きな課題がありますが、二つとない貴重な郷土資料を、より多くの人に、よい状態で見ていただけるよう努めています。みなさんのお知恵とご来館をお待ちいたします。

(福岡)

#### 郷土資料館なんでもQ&A

**Q** 特別展「戦争と豊島区」で南京虐殺事件の写真パネルが展示してありました。この事件が虚構であり「でっちあげ」であるとする主張もあると聞いておりますが……。

**A** 南京虐殺事件とは、日中戦争中の一九三七(昭和一二)年二月、中国国民政府の首都南京を攻撃した際、日本軍が南京城およびその周辺でおこした事件で、中国人捕虜の不法な殺害、多数の一般民衆に対する掠奪・放火・虐殺などの残虐行為を行なつたというものです。ところが、この事件に関して、事件そのものを否定する考えの人々もいます。ただ、これらの主張は、改ざんされた資料に依拠しているなど、その論拠は極めて薄弱です。

しかし、現行の文部省検定教科書でも、「南京虐殺事件」という名称は見えませんが「少なくとも十数万人の中国人を虐殺したといわれている」と記述しているものがあります。そのほか、旧陸軍将校の親睦会である偕行社による「南京戦史」でさえも、被害者数の算定にはかなりの問題があるものの、事件があつた事実を認めています。

南京虐殺事件の実相を明らかにするため、現在でも研究が続けられ、元日本兵の多くの証言などによつて、事件は否定しようのない事実として証明されています。

(伊藤)



# 連載 一点の資料から

## 《その14》

### 疎開学童、寺の静幽を破る

一九四四（昭和一九）年八月二二日、豊島区の時習国民学校（現・時習小学校）の男子六年生七〇人余りが長野県埴科郡坂城町の満泉寺で付添いの先生方と一緒に集団生活を始めた。アジア太平洋戦争末期、予想される本土空襲に備えて、都市の学童たちが学校ごとに地方に移った集団学童疎開です。時習校の他の子どもたちは坂城のもう一つのお寺である大英寺と隣町の同郡戸倉町の戸倉温泉が疎開先でした。

長是清閑安法城 従今開放委童生  
回頭戦況多難局 老骨聊應国策情

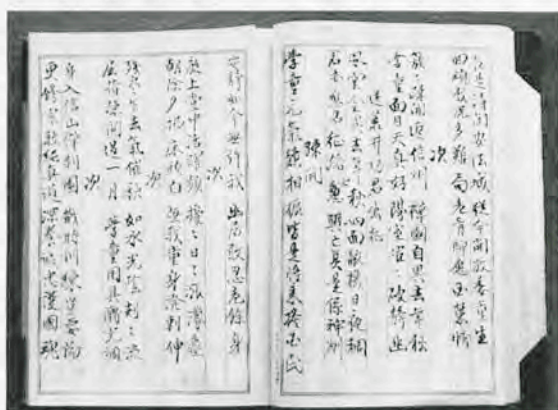
簇々疎開迎信州 禪園自異去年秋  
學童面目天真好 陣室喧々破静幽

これは写真（中段）の冒頭にあるもので、当時の満泉寺住職齋藤練暁（通庵練暁）さんが二二日その日に作られた「疎開 二首」と題する漢詩（題は前頁に書かれています）で、おおよその意味は次のようになります。

長い間、寺の中で静かに過ごしてきたが、今、寺を疎開学童に開放することにした。

戦況多難の時期を考え、老人もわずかながら国策に応えたい。  
続々と疎開学童を信州にむかえ、禪寺も去年とは違ってしまった。天真爛漫な子どもたちによって、寺の静けさは破られている。

戦争の影響がこ  
うした寺  
院にまで  
及び、こ  
れまでの  
生活が一  
変してし  
まったこ  
とに感傷  
をいだき  
つつ、子  
どもたちを思いやり、そして国策である戦争に協力しなければという齋藤住職の気持ちがよく表れています。



齋藤住職は日々の暮らしの中で感じたこと、思ったことを「心韻録」（写真・下段）と題した

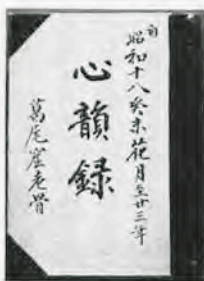
和綴じの帳面に漢詩でつづっていました。この詩を始めとして、疎開学童を主題にしたものと同じ頁に三作品あり、以後も多く作られています。そのいくつかの題と内容を次にあげておきます。

「坂城時習両学生秋期運動会」…坂城国民学校での地元の子どもと一緒に運動会の様子。

「為学童」…：新年を迎えた学童に。  
「疎開学童送別」…：卒業のため帰京する六年生に家庭にもどる喜びを。

この漢詩は元疎開学童の方たちが最近、満泉寺を訪問された時に、現在の住職さんとの談話の中で「先代の和尚さんが漢詩で使った『簇』という字を教えてもらった。」という話題が出て、それから「心韻録」の中から見つけられたものです。資料館には鴻巣了さんからご連絡とコピーをいただき、

この一〇月に満泉寺さんのご好意で写真撮影をさせていただきました。（青木）





# 博物館実習生の「ひとこと」

## 実習を終えて

資料館では、去る九月一日から一四日までの二週間、毎年恒例の博物館実習を行いました。

この実習は、教職課程の教育実習と同様に、博物館学芸員の資格を取得するためには必要不可欠の課程で、学生にとっては最後の難関です。

今年度は、六大学から一名ずつ、計六名の学生を受け入れました。それぞれ専攻分野が違ふ学生がペアを組んで、資料整理、写真撮影、民俗調査、石像物調査、特別展の監視などを行い、最後に班ごとに作成した展示シナリオ（いずれも力作！）の発表を行なって、分刻みの過密スケジュールの実習は無事終了しました。スパルタ実習（？）といわれる豊島区で鍛え上げられた学生に、ひとこと感想を寄せていただきましたので、ここに紹介します。

### 実習での二週間

東京学芸大学教育学部三年 桑澤祥子  
実習での二週間、いろいろな作業を体験させて頂きました。個々の資料の扱い手順や知識はもちろん、モノからどんな情報が引き出せるのか、どうとらえればよいのかといった「資料を見る目」を学びました。

の大きな課題になった。自分のために梱包の時間がなくなってしまったことをお詫びしたい。

展示シナリオの作成は、頭で想定していることと、実際に表現することの違い、そしてその難しさを実感することができた。自分は何度か心の中で挫折していたのだが、パートナーのひたむきに調べている姿を見て、こちらも頑張らねばと奮起して最後までたどり着いたのであった。この実習を今後どのように活かすか、これが我々に問われる課題であろう。とにかく内容の濃い十二日間であつた。資料館の皆様お世話になりました。

Almighty Yamanaka

立正大学文学部四年 多貝理佐  
今回の実習を通して、学芸員とは、あらゆる知識を持ち合わせていないとやっていけないということが痛い程よく分かりました。

なかでも展示シナリオの作成では、全く違ふ関心を持った者同士がある一つのテーマに取り組み、シナリオを作り出すというところで、かなり困難な作業になると思っていました。しかし、ある一つのテーマを決め、それに沿ってお互いが学び合っていくことによって、知識も広がりアイディアも生まれ、結果的にはかなり満足のいくものができ、嬉しかったです。特に、自分のパートナーが全く面識のない分野であつたにもかかわらず努力してくれたので、この様な結

また、調査作業とともに、それを客観的に整理してテーマに合った切り口を与え、人に伝えていく展示のシナリオ作りをやったことはとても有意義だったと思います。テーマ設定から資料探し、構成まで自分たちで苦労して考えたことで、日頃の調査の積み重ねや地域との交流から展示が生まれてくること、展示からまた見学者とのつながりができ、調査や次の展示へ生かされていくことを実感しました。

講義で習ってきた博物館の仕事の大きな柱、調査研究、収集・保管、展示・教育。見学者の立場で展示しか見えてこなかった博物館でしたが、実際の作業や働く館の人々の姿を通して、これから三つの仕事相互に密接に結びついていることを改めて理解し、頭の中だけの概念からより生き生きとした博物館が見えてきそうです。

### 実習を終えての課題

大正大学文学部四年 中島英人  
長いような短いような実習期間が終わった。初めてのことも多く、感動の連続だった。その中で自分にとって一番苦しかったのは、図を描くことであつた。スケッチはもとより、計測図すらも満足に描けない自分が情けなかつた。今後



果が生まれたと思います。この時の感動は忘れることが出来ません。

いつか、自分が学芸員として同じ喜びを再び味わえる日が来ることを夢見て、これからも様々な勉強に取り組んでいきたいと思います。短い実習期間の間に、これ程までの体験をさせて頂き、心から感謝しています。

### 実習を振り返ってみて

国士館大学文学部四年 長沼 豊  
二週間の実習も終わり、自分が学んだ事を振り返ってみると、郷土資料館に対する考え方が全く変わってしまったように思います。

実習内容はとても多く、これが現実なのかと思っていたら実際にはほんの一部であって、その一部も満足にできないという事に気づいた時、自分の考えの甘さをつくづくと感じました。それでも何とか無事に終える事ができたのは、学芸員の方々はもちろんですが、一緒に参加した実習生の人達にも恵まれたからだと思います。実習を通して感じたのは「残す」という事の大切さです。正確に残すことはとても手のかかる作業ですが、それが後になってどれだけ役に立つのかを知ることができました。実習中は毎日がとにかく忙しかったのですが、今はその忙しかった毎日を貴重な経験として今後役に立てていきたいと思っています。



博物館実習を終えて

区内羽黒神社にて（前列左から桑澤・矢島・中丸、後列左から中島・小林学芸員、長沼の各氏）

学芸員はよく「雑芸員」と言われていますが、今回の実習でそれが的を得た表現だと思えました。実習期間の十二日間で実務を行なったのは七日間、五日間は地域見学や展示シナリオの作成に費やしました。実務のほうは大変内容の濃いもので、一日がものすごく早く感じられ、家に帰ると疲れてただ眠るだけの毎日でした。様々なことをこなさなければ学芸員にはなれないのだと、その仕事のハードさを実感できたのは良い勉強になったと思います。特に、豊島区立郷土資料館は地域博物館なので、自分の足を使って調査し、地元の住民とのパイプを太くしておかねばならないということもあり、大変活動的な印象を持ちました。

また、実習のメインだった展示シナリオの作成は、専攻外の時代で「もの」を中心に構成す

るという非常に難しい課題であり、初めは戸惑いましたが、終わってみると本当に楽しく、良い経験になったと思います。

### 実習を終えた感想

法政大学文学部四年 中丸道彦  
実習に来るまで、学芸員の仕事を体験したことが無く、いつも来館者の立場で博物館を見ていました。そして、学芸員とは、奥の方の部屋に閉じこもり、ひたすら研究に取り組んでいるような、ちょっと敷居が高い所にいる人達という印象を持っていました。

このような偏見(?)を持って実習に突入した私ですが、聞き取り調査では、実際に区民の方の家を訪れ、貴重なお話しを聞かせていただきました。また、区民の方のご厚意で、間魔堂や羽黒神社を調査することができました。そして、実習を行なう中で、調査・資料収集・展示等の学芸員の仕事は、地域の人々の協力によって成り立ち、博物館はそんな人々に支えられて成り立っていることを知りました。

実習を終え、地域の人のつながりを大切にしながら、地域のテーマを掘り起こしている学芸員を、とても身近な存在と感じると共に、私もそのような学芸員になりたいと思いました。

実習本当におつかれさまでした。皆さまの今後の活躍を期待しています。（横山）



# 資料館からのお知らせ

## ◆収蔵展示室の展示替え

館蔵資料の燻蒸後、展示替えをしました。

## ○特別展「戦争と豊島区」(抄)

戦時中の生活資料や空襲による被災資料、学童疎開に関する資料を展示しています。

## ○絵はがきにみる戦争

戦時中の軍事郵便のほか、新たに寄贈された戦争の写真はがきと絵はがきを紹介しています。

## ○雑司が谷鬼子母神と川口屋

江戸時代から鬼子母神社境内にあった船屋川口屋の寄託資料を中心に展示を行なっています。

## ◆博物館講座「博物館で何だ？」

今年で三年目の博物館講座のテーマは、「地域の産業と博物館」(仮題)です。地域の産業につ



いてユニークな活動を行なっている博物館を訪ね、学芸員による講義と見学を行います。

第一回 2月17日(土) 午後2〜4時

オリエンテーション

第二回 2月24日(土) 午後1時〜4時

「東京近郊農村の生業を記録する」

葛飾区郷土と天文の博物館

学芸員 堀 充宏 氏

第三回 3月2日(土) 午後1時〜4時

「海苔の生産用具と技術を保存する」

大田区立郷土博物館

学芸員 北村 敏 氏

第四回 3月9日(土) 午後1時〜4時

「『地域の変遷』の展示と産業資料」

相模原市立博物館

学芸員 浜田弘明 氏

※詳細は「広報としま」にてお知らせします。

## 編集後記

今年も師走に入り、まもなく一年が過ぎようとしています。かたりべ40号をお届けします。

今年は戦後50年という一つの節目の年であり、また阪神・淡路大震災をはじめ、数多くの事件が発生した激動の年でもありました。皆さんにとって今年はどうな一年だったのでしょうか。

さて資料館では、十一月に文化女子大学の内田青蔵先生を講師に迎え、地域史講座「郊外の住宅地とすまいの形成」(六回連続)を開催しました。夜の開講にもかかわらず毎回三〇名前後参加者が集まり、熱心に講義を受けていました。また、江戸東京たてももの園と目白の明日館の見学会も好評のうちに終了することができました。講座の報告は次号に行なう予定です。

さらに来年二月から、博物館講座「博物館で何だ？」が始まります。博物館の裏側を知る絶好の機会でもあります。皆さんの積極的なご参加をお待ちしております。来年も引き続きごひいきのほどよろしくお願いいたします。(Y)

かたりべ

No.40

1995年12月15日

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話03-3980-2351

豊島区広報印刷物L30-07-073  
本紙は再生紙を使用しています